

C. リーブス教授単独インタビュー

米歴史遺産保存の巨人、新学期への意気込み語る

interview, photo _liebs, banna

先9月末、米国より、チェスター・リーブス教授が来日。リーブス教授は、フルブライトの招聘で2007年7月までの約1年間、客員教授として東大に籍を置き、今学期から大学院で教鞭を取る。講義「都市設計特論」開講間近の10月3日、まだ荷物少ない14号館2階の部屋に、教授を訪ねた。

magazine (M): 明後日からの講義について聞かせてください。

liebs (L): 講義のテーマは、「米国における歴史遺産の保存—文化横断的パースペクティブから

(Conservation in United States - a cross cultural perspective)」というものです。私が実際に手がけたものをはじめとして、歴史遺産保存・活用の事例を、ビジュアルに紹介していくつもりです。その際、日本との比較の視点を、常に持つようにしたい。私は45年間、米国の歴史遺産保存に関わり続けてきました。保存・活用の考え方や実践においては、米国の方が日本にやや先んじていると言えますが、コンパクトな都市のあり方など、米国が日本を範とすべきことも多い。「横断的」に見て・考えることが大事です。

講義の1回分を、本郷通りのフィールド調査にあてる予定です。建物や街路のすがたかたちを見ながら、沸き起こってくる「なぜ」「どのように」「誰が」「いつ」等々の疑問、これを大切にしたい。まず、目で見る。問う。それから文献に当たって知ってゆく。私が米国で、そして日本で実践してきたことです。

M: ちょうど、我々都市デザイン研も昨年、オギユスタン・ヘルク氏を迎えて、本郷まちあるきを実施したところです。

L: それは知りませんでした。非常に興味深いですね。そのプロジェクトに参加された研究室の皆さんにと

っても、時間をおいて改めて見てみると新しい発見があることと思います。また、西村先生流と私流とで、むろん通底するものは同じですけども、見方や考え方の違うところは当然あるので、それも楽しんでもらえるのではないのでしょうか。「まず見る」という私のモットーに従って、「ヘルク本郷」の冊子は、調査の後まで、読むのをとっておくことにしますね。

M: ゼミも開講されるそうですが、どのような構想を?

L: これは、詳しくは10月12日の研究室会議で皆さんに諮って議論していきたいのですが、今のところ、「ママチャリ」を扱ってみたいと考えています。

自転車は、CO₂排出がなく、安価で、老若男女問わず気軽に乗れる、正に次代の「コンパクト」「サステナブル」な都市に合った交通手段です。広い国土に都市がスプロールした結果、自動車なしでは生活できなくなった我々米国人にとって、自転車が身近にある日本の都市生活は、とても魅力あるものに映るのです。

中でも、「ママチャリ」は、若い人には「かっこ悪い」と敬遠されがちだけれども、安価で丈夫、スタンドがあって駐輪スペースも少なくて済む、荷台には野菜から子供まで何でも載せられる。日本が誇る文化、と言えます。



14号館2階のリーブス教授室にて

チェスター・リーブス Chester Liebs 教授略歴

米国バーモント大学名誉教授。コロンビア大学でJ.M. フィッチに師事して歴史遺産保存を修める。1971年からバーモント大学へ。同大学で大学院歴史保存学科 (University of Vermont's Graduate Program in Historic Preservation) を設立して初代学科長となる。米国の歴史遺産保存の泰斗として活躍するかたわら、1992年にフルブライトで初来日。同年から翌年にかけて、東京芸大の前野まさる教授(当時・現名誉教授)と共同で、日米歴史遺産合同調査を行い、岡山県玉島・高梁を訪れた。

その後もたびたび来日して全国を回っており、日本はすでに「第二の故郷」と言う。1995年には、旧東海道の調査。1997-98年、つくば大学客員教授。2000年からは3年間、東京芸大で教鞭をとり、谷中のまちづくりなどもつぶさに見てきた。その間、2002年春には東大でも講義を行っている。

2005年バーモント大学を退官後、ニューメキシコ大学で教える。2005-06年は、アルバカーキ-サンタフェを結ぶ歴史的な道路「ルート66」を調査した。著書に「Main Street to Mirabele Mile」(1985/95)など。



2001年 佐原にて (東京芸大のまちあるき)

2005年 ルート66 調査

建築学会発表・写真ルポ

各プロジェクトまちづくり活動の成果を、晴れの舞台上で



近場開催では研究室的には盛り上がりがない、というジレンマもある秋の建築学会発表だが、先9月8日に神奈川大学で行なわれた今年の学会では、各プロジェクトチームがポスターセッションで奮闘した。

- ・八尾町西町におけるまちづくり活動を通じたまちづくり気運の高まりについての考察
- ・民官学の連携による地方都市中心市街地の将来ビジョン形成に関する研究
- ・喜多方における地域資源を活かしたまちづくりの実践その6
- ・小単位による地域づくりを支援する地域空間計画に関する研究

岩手県郡(旧)大野村における「おおのキャンパスビレッジ」構想による地域づくり実践

【写真】 左/江口M2(八尾)
右左/永瀬D2(喜多方) 右下/野原助手(大野村)

生命短し、旅せよ海外へ

研究室・海外旅行ブームの9月

text_bannai

先ずは、中島助手。「9階の主」の長期不在には、新宿・四谷チーム中心に動揺が走っていたが…

「9月16日から25日まで、ポーランドの古都クラコフで開催された歴史都市における環境保全をテーマとした国際会議（EU R0-ECO2006）での発表、イギリスの商都バーミンガムにおける都市デザイン史資料の収集などの目的で、研究室を留守にしました。各用事の合間には、第二次世界大戦の悲劇の都市ワルシャワや、敬愛するレイモンド・アンウィンの設計したハムステッド田園郊外などにも足を伸ばして、見学してきました。」

しかし、お土産は質素なチョコと廉価な紅茶のみ。

「本を買いすぎたためか、帰りの飛行機で10kgオーバーで300ポンド（7万円！）の追加料金をとられたので、満足のいくお土産が買えなかった。申し訳ない。」との苦しい言い訳。



クラコフの広場



伊藤M1は、9月半ば、新宿・落合チームの仲間に惜しまれつつ渡伊。

「ジェノバ、ミラノ、ベネチア…イタリアのあとは、スイス、オーストリア、リヒテンシュタイン、等々、計8カ国を車で回って来ました、ハイ。」

インターン体験記<続>

NSRI・「勝ち組」疑似体験

M1 平林直

お世話になったのは日建設計総合研究所（NSRI）。NSRIは今年、日建設計から独立した新しいグループ会社です。都市経営研究センターと環境エネルギー研究センターの二つの柱で成り立ち、コンサルティング、政策提案・情報発信、研究・開発を行います。西尾さんという頼れるボスの元、日本における「エリアマネジメント」の動向を数々の事例を集め検証、それをまとめるという作業に主に携わりました。私のやり方を尊重して下さり、充実した調査とまとめが出来ました。

働いている皆さんの印象は紳士的but情熱的といった感じ。しかもここはテザ研出身の安田さん、黒瀬さん、内山さんという素晴らしい先輩方が働く熱いフロア。毎日遅くまで働いていらっしゃるのに（冗談抜きで忙しそう

最終目的地は？

「もちろん、世界最大のビール祭り・ミュンヘンのオクトーバー・フェスト。屋間から、路上のオープン席で皆がビールを飲んでる光景に感動。俺も、5時にはきっかり上がる生活がしたいですね。」残念ながら、そうは（落合）問屋が卸さない。

「リトルジョッキを飲みすぎで、帰りのフランクフルト空港の床で寝込んでました。」飲み会不敗神話を誇る男も、アルコール度数の高いドイツビールの前に、撃沈！



インスブルックの街並み



続いては、新宿プロジェクト担当を脅威の体力でざくっと仕上げた後、気持ちよくカンボジアに旅立った、塩澤M1。

「私のほそかに熱い趣味となっている「遺跡めぐり」に火をつけたカンボジアのアンコールワット。訪れるのは今回がはじめてではありませんが、なぜか何度でも行きたくなくなってしまいます。」

体育会系の塩澤記者にとっては、カンボジア一人旅など、「深夜のコンビニ」のようなものなのだろうか。



八重洲の日建設計総合研究所

でした）、3先輩とも目をキラキラさせて都市への理想と情熱を語って下さいました。働く姿、立ち居振る舞いが実にかっこよかったです。先輩方を見て自分が充実して働く「勝ち組」イメージを具体的に描けました。それだけでも私の今回のインターンシップは成功。

早く社会に出たい！でも「勝ち組」イメージと大きなギャップのある自分も痛感。都市への熱い「気持ち」を磨くため、さらなる精進を決意しました。支えてくれた皆さんに感謝！

プロジェクトかき入れ時の夏休み。新宿プロジェクトを中心に、喜多方、八尾などの作業が連日連夜続き、現地訪問が相次いでいることは、本紙でも再三お伝えしている通り。そんな中、新学期開始前にして、ずっと海外へと脱出していく面々が…

「カンボジア在住の日本人の方と話す機会があり、「この町は今後どうしたらよくなると思う？」と唐突に質問され、とまどいました。自分が何ができるのか。力不足に胸を痛めて帰ってきました。」M1 ぎっての理屈肌は、アンコールワットの前でも苦悩していた。



ベンメリアの遺跡



9月25日には、帰省するイルジM2をたよって、永瀬D2、後藤M2らが韓国・ソウルへ。イルジM2の論文の対象である北村地区は、韓国の伝統的建築「韓屋」が軒を連ねているが、観光地化は未だあまり進んでいない、という。一同が泊まったのも、「韓屋」ゲストハウス。

「『新宿のことは忘れて楽しもう』と申し合わせていたのに、気がつけば眺望点を捜して。知らず知らず、歩きながらの写真コマ撮り。帰ってみれば、撮った写真が1000枚を超えていました。」と後藤M2談。身についた新宿グセは、なかなか脱げない…



北村地区からの眺望



そのほか、江口M2は、9月4日の建築学会での発表後に颯爽とパリに旅立ち、未だ帰国せず。今夏研究室の最長不倒旅行には、修論原稿を携えているのや否や？！

楊M2も、台湾に一時帰国中。故郷で、リフレッシュをしつつ調査、の日々だという。



プロジェクトの作業を必死で頑張っている国内残留組のホープ中島D1は、「心のコもったお土産は当然のこととして、海外での見聞を研究室に還元してくれることを期待しています」と大人のコメント。



韓・伊・カンボジアみやげ

先34号・夏休みアンケートで、「旅せぬ院生」を取り上げたが、正にその批判を覆すような、旺盛な海外熱。フンテンボずれた夏休みを、皆、有効に活用していたのだった。めでたし、めでたし。

卒業式、しめやかに

9月29日、夏学期で修了する院生のための卒業式が執り行われた。参加は、金宗範M2（現D1）、大谷剛弘M2、安部大輔D4の3名。祝福するギャラリーもおらずに淡々と進行した式だったが、式後3名は安田講堂前で記念撮影後、10階院生室でさやかな祝杯を挙げた、という（金D1談）。

ウィーンの名・第一便

8月末にウィーン留学に旅立った竹山M2からの絵葉書第一便は、フンデルトバツァーハウス。滞在1週間にして、研究が「始まってしまった」とか。同居するのは「トルコ美女」とのこと、この一言が研究室内の訪壊気運に火を点けそうだ。



編集後記

text_bannai

風貌どおりと柔和なリープス教授は、こちらに気を使ってクリア且つ平易な英語で時おり日本語を交えつつ、快くアポなしのインタビューに応じてくれた。教授の「横断的」パースペクティブの導入で、研究室の国際化もいっそう質的な高まりを見せてゆくだろう、と期待する。